総力特集 救急医療

高砂西部病院 病院挙げ救急に注力

「24時間365日、断らずに患者さんを受け入れる救急医療は徳洲会の原点です」――。こう強調するのは高砂西部病院（兵庫県）の新保雅也院長だ。朝礼時に「救急の断りをなくそう」と呼びかけるなど、スタッフの意思統一を図り、病院を挙げて救急医療に力を入れている。

意思統一や緊密な連携で件数増

「今後、より一層地域の救急医療に貢献していきたい」と新保院長

新保院長が岸和田徳洲会病院（大阪府）から高砂西部病院に副院長として赴任した３年ほど前から、救急件数は大幅に増加（図）。昨年は年間2,000件を超え、今年も昨年以上のペースで救急患者さんを受け入れている。医師をはじめ看護師、コメディカル、事務職員と全職種が懸命に取り組んできた成果だ。

同院は兵庫県南部の海岸線に面する高砂市に立地する。高砂市消防本部管内では2014年度に3,787件の救急事案が発生、そのうち1,042件（27.5%）の搬送を同院が受け入れた。4台に1台以上の割合で受け入れている計算だ。

救急件数増加の背景には、病院を挙げての取り組み強化に加え、地域の医療機関や救急隊との良好な関係、円滑で緊密な連携体制がある。「明らかに脳や循環器の疾患が疑われ、救急隊のほうでトリアージ（重症度・緊急度の判定・選別）が可能な場合は、脳外科の専門病院や県立の循環器病センターに搬送されます。一方、判断が難しい症例などは、まず当院に連絡が入ることが多いですね」（新保院長）。

救急搬送で最も避けなければならない事態は、搬送先が決まらず患者さんへの医療介入が遅れてしまうことだ。そのため同院では救急隊から搬送要請が入った場合、救急隊からの患者情報により、専門病院などへそのまま搬送することが適切と判断されるケースを除き、可能な限り受け入れる方針をとっている。搬送されてくる救急患者さんの大半は高砂西部病院で対応可能。診察の結果、仮に循環器や脳など同院では専門的な治療の実施が難しい症例だったとしても、各種検査などで診断をつけることによって、より適切な医療機関への搬送にスムーズにつなげることができる。結果的にたらい回しを防ぐことができるというわけだ。

「地域の救急隊が当院に期待しているのは、救急を断らずに受け入れ、診断・治療を行うことに加えて、必要に応じて専門医療機関に振り分けを行う機能・役割です。こうしたニーズは、これからもしっかりと果たしていきたい」と新保院長は力を込める。

上野英三事務長は「当院で診断がついて搬送先が決まると、搬送先の医療機関に連絡を入れるのですが、積極的かつ好意的に引き受けてくださっています」と地域の医療機関との良好な関係をアピール。

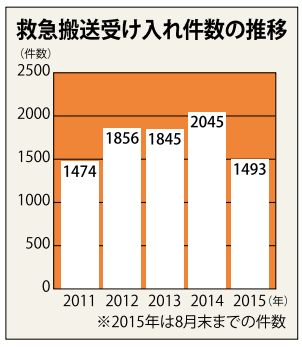
同院は救急隊との連携強化の一環で、1カ月に一度の事例検討と、4カ月に1度の勉強会を実施。事例検討は、搬送時の救急隊による処置や病院到着後の診断・治療内容などを今後の参考とするため、救急隊にフィードバック。

勉強会では救急隊が事例発表を行う。また毎年、高砂市消防本部、高砂市医師会、高砂市民病院、高砂西部病院の4団体でソフトボール大会を開催するなどし、親睦を深めている。高砂西部病院は大会2連覇中で、今年も10月3日に開催予定。

院内のスタッフ教育にも注力。例年、同院を会場にTCLS（徳洲会二次心肺蘇生法）コースを開催し、救命処置の習得を重視している。今年も8月22、23日に開催し、約20人が受講。同院の看護師に加え、院外からも救急隊や他の医療機関からの参加があった。

新保院長は「スタッフの充実を図りながら、より一層地域の救急医療に貢献していきたい」と意気込んでいる。

救急搬送受け入れ件数の推移



中部徳洲会病院 連携強化で質向上

救急患者搬送業務連絡会

中部徳洲会病院（沖縄県）は救急活動の質の向上を図るため、地域の医療機関関係者や救急搬送を担う消防署職員らを対象とした救急患者搬送業務連絡会を毎年開催している。今年も8月21日に沖縄市内で実施。今回で19回目を数える。症例発表では活発な質疑応答・意見交換を行った。

救急隊との緊密な連携のもと円滑な救急医療を展開。写真は中部徳洲会病院ER(救急外来)での処置中の様子

中部徳洲会病院からは伊波潔院長をはじめ医師、看護師など162人が参加。近隣の市町村消防（中部地区メディカルコントロール協議会を構成する6消防本部）から84人、ほかにも救急救命士実習生6人、医療系専門学校講師1人が会場に集まり、参加者は計253人にも上った。

伊波院長が開会の挨拶を行った後、来年4月予定で進めている同院新築移転計画の進捗状況を眞玉橋顕一事務長が報告。このなかで眞玉橋事務長は、救急隊員らに関係する救急外来エリアや救急ワークステーション（救急隊や救急車が病院に常駐し、救急車出動時に医師が同乗する仕組み）構想について説明した。

このあと4題の症例発表を実施。沖縄市消防本部の新垣元気・救急隊員は、「トラック単独・Dr（ドクター）Car（カー）連携活動事案」をテーマに発表した。新垣・救急隊員は、車内に閉じ込められた運転手の救出時に、同院が運用するドクターカーに乗った医療スタッフと連携し、現場で迅速な医療処置を実施した症例を報告した。

連絡会には地域の消防本部や医療機関から約250人が参集

続く2症例目は、中城北中城消防組合消防本部の宮城英一郎・救急隊員による「小児の脳出血症例」。救急要請時の「運動後に気分不良を訴えた。熱中症かもしれない。呼びかけにはうなずく」といった通報内容や、傷病者の年齢、現病歴、発生概要から熱中症疑いで救急活動を開始。搬送後、中部病院で詳しい検査を実施したところ、診断の結果は脳出血だったことをふまえ、小児の脳血管障害の病態把握の難しさを指摘する発表を行った。

3症例目は、比謝川行政事務組合ニライ消防本部の玉城充・救急隊員が「交通外傷による多数傷病者症例」をテーマに発表した。傷病者4人のうち2人が意識なしでトリアージ区分が赤、2人は意識があり歩行困難でトリアージ区分が黄色と早急な判断が求められた事故現場。この事例を通じ、適切な指揮命令・情報共有を可能にするためにも、日頃から大規模災害を想定した訓練や近隣消防、医療機関と連携を図ることの重要性を強調した。

4症例目は、同院の齋藤智哉・初期研修医（1年次）による「壊死性筋膜炎の一例・Dr Car活動事案」。齋藤・初期研修医は「ドクターカーの出動で、迅速に患者さんの病態を把握でき、救急隊および病院スタッフが詳細な情報を共有できたことが、傷病者の救命と予後に有用だった一例を経験しました」と結んだ。

伊波院長は「より質の高い救急救命活動の実践を目指すうえで、救急隊や地域の医療機関の方々と集まって議論を交わし、意見交換することは大きな意義があります。今後もこのような連絡会を定期的に開催していきながら、各関係機関が顔の見える関係を構築し、連携を深め密にしていくことで、迅速な救急救命活動を行うことができます」と、救急医療のさらなる充実に意欲的だ。

鎌ケ谷総合病院 距離感ぐっと縮まる

消防署向け月2回勉強会

鎌ケ谷総合病院（千葉県）の救急搬送受け入れ件数が好調だ。同院は病床数248床の中規模病院だが、救急搬送受け入れ件数は年間5600件程度と、400床規模の病院に引けを取らない。「1月、2月は月間600件超、7月以降も月間470～480件程度で推移しています」と、胸を張るのは救急部の宇藤薫医師だ。好調の理由は宇藤医師が2013年春にスタートした消防署向け勉強会にある。月2回、同じ内容で開催、近隣市町村の消防署から救急隊員のみならず消防隊員、事務職も参加、その数は月60～80人に上る。

「勉強会では当院が第二次救急指定病院であることから、その対応範囲や、搬送中に医師に提供すべき情報などについて講義しています」と、宇藤医師はあくまでも救急隊員の視点で勉強会を開いているとアピール。

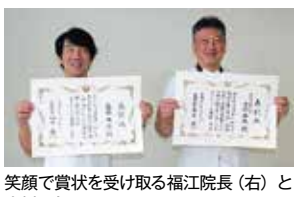
この勉強会の効果は抜群で、回を重ねるにつれ、患者さん搬送時の早い段階で救急隊員から宇藤医師に連絡が入るようになったという。宇藤医師は「救急隊員との窓口が広がると同時に、距離感も縮まっています」（宇藤医師）また、救急隊員の積極的な実習受け入れも、同院と救急隊員とのパイプを太くする効果を発揮している。同院は、より実践的な実習に腐心、「初期研修医並み」の濃厚さを誇っている。さらに宇藤医師はJPTEC（病院前外傷教育プログラム）など各種プログラムのインストラクターも務めるなど、連携強化に余念がない。

「将来的には総合診療型の救急医療にしていきたい」と宇藤医師

同院の山本穣司院長は「今年に入って救急部は医師2人体制になりましたが、今後、臨床研修病院の指定を受け、初期研修医を教育しつつ初期対応を担ってもらい、救急医療を一層強化していく考えです」と抱負を語っている。

夜間・休日も心電図チェック

県の救急功労賞 古河病院が受賞



笑顔で賞状を受け取る福江院長（右）と髙橋医師

徳洲会グループの古河病院（茨城県）は9月7日、茨城県から救急医療功労賞知事賞を受賞した。これは年1回、救急医療に貢献した団体および個人に贈る賞で、今年は病院や消防本部など6施設と医師ら34人が表彰。団体部門で同院が、個人部門で同院循環器内科部長の髙橋暁行医師が選ばれ、同院は唯一のダブル受賞となった。

福江眞隆院長は「この賞状に恥じない医療をしっかり行っていきます」と笑顔。同賞は救急隊員らからの評判も評価対象となる。千島義明事務長は、ふだんからマンパワーの許す限り「断らない医療」を実践してきたことに加え、髙橋医師の赴任により、3月に心臓カテーテル治療をスタート、夜間・休日も急性心筋梗塞の救急搬送に応じていることなどが高評価につながったとの見方を示した。

急性心筋梗塞は、心臓の冠動脈が詰まって血液が流れなくなる疾患で、一刻も早く心カテーテル治療を行う必要がある。しかし、「当院周辺には夜間・休日に心カテを行っている施設がほとんどありません」と千島事務長。同院は、夜間・休日に救急搬送されてきた急性心筋梗塞の患者さん8人を救命してきた。

髙橋医師は、心臓に不安を抱える方を対象に24時間・365日、患者さんの心電図を遠隔チェックを行う取り組みも始めている。計測した救急外来や入院中の患者さんの心電図を、ICT（情報通信技術）を利用し確認、必要があれば対応を指示する。就寝中や休日も気の休まる時がないが、「患者さんの安全を考えれば、必要なことだと思います」と髙橋医師。こうした地道な努力も評価対象になったという。

髙橋医師は橋本昌・茨城県知事から賞状を受け取った

髙橋医師は表彰について「光栄です」とはにかみ、「今後、救急搬送の応需率が下がってしまえば意味がありません。通常診療の時間外であっても、患者さんの生命に危険があれば対応するという当たり前のことを、当たり前に実施していきたい」と熱く語っている。